

郭沫若と『社会組織と社会革命に関する若干の考察』
(河上肇著) についてのノート (中)
- 「革命文学」論争覚え書き (6)

中 井 政 喜

目 次

- I はじめに
- II 『社会組織と社会革命』についての郭沫若の言及
- III 影響関係の明瞭な点について
(以上、前号)
- IV 影響を受けつつ反論した点について (今号)
- V 文芸理論の基礎として受容した可能性のある点について (次号)

IV 影響を受けつつ反論した点について

この章では、郭沫若が、河上肇の所論に対して影響を受けつつ反論した点を取りあげたい。それは、時機尚早である社会革命の企図の是非をめぐる問題である。

まず河上肇は次のように指摘する。

マルクスは、「『経済学批判』序説」(1859年)等において、社会組織の改造(社会革命)には一つの自然法則が貫いており、社会がその進行の自然法則を探求しえたにしても、社会はその自然な発展段階を飛び越えることもできず、立法によって排除することもできない、とした(マルクスの進化論者としての面)。

「『一の社会組織は、総ての生産力が其の組織内で余地ある限り其の発展

を為し遂げた後でなければ、決して顛覆し去るもので無く、又新たな、より高度の生産関係は、其のものの物質的存在条件が古き社会の胎内に孕まれたる以前に於て、決して発現し来るものではない。』」（『経済学批判』序言」、1859、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「下篇 第2章 社会革命と政治革命」所引、河上肇の傍点は省略した⁽³⁶⁾）

しかしまた一方で、彼ら（マルクス・エンゲルス）は『共産党宣言』（1848年）等において、彼らの目的がすべて従来の社会秩序の強圧的転覆（政治革命）によってのみ達せられる、としている（革命主義者としての一面）。

「『共産党の最も手近かな目的は、……無産者の階級への形成、有産者の支配の顛覆、無産者による政権の攫取、即ち是れである。』」（『共産宣言』、1848年、前掲書、「下篇 第2章 社会革命と政治革命」所引、河上肇の傍点は省略⁽³⁷⁾）

「『彼等（共産主義者を指す——中井注）は、彼等の目的が、総て従来の社会秩序の強圧的顛覆によってのみ、達し得らるべきことを、公に宣言する。支配階級をして共産主義者の革命の前に戦慄せしめよ。』」（『共産宣言』、1848年、同上⁽³⁸⁾）

この二面は、ゾムバルトやテンニースの論ずるような、マルクスの解き難い矛盾撞着ではない。マルクスは、国家と社会とを明白に区別した如く、国家革命（政治革命）と社会革命（経済的基礎の変動を根底とする上部建築全体の変革）とを明確に区別した。彼ら（マルクス・エンゲルス）は、資本主義から社会主義への推移をもたらすべき社会革命は、無産者による政権の獲得を目的とする政治革命の成功を通じて実現される、と考えた。ただその場合、社会の生産力が従来の組織内で発展しつつした後でなければ、社会革命は実現できない。河上肇はマルクスの進化論者としての一面（社会革命）と革命主義者としての一面（政治革命）を、矛盾したものと考えるのではなく、上のように整合させて解釈した⁽⁴⁰⁾。

またその場合、マルクス・エンゲルスは、強力革命を否定するものではなかったけれども、平和的経路で行われる無産者の政治革命の可能性と蓋然性を認めていた。

「『（労働者は、労働の新たなる組織を樹立するために、何時かは政権を掌握しなければならぬ。）しかし吾々は、此の目的を達するための径路が到るところ同一である、と主張する者では無い。（中略）そうして吾々は、

米国や英国の如き国々では（中略）労働者が平和的の徑路で彼等の目的を達し得ると云うことを、否認するものではない。しかし一切の国々で皆そうだと云う訳ではない。』（マルクス、「ハーグ大会についての演説」、1872・9・8、前掲書、「下篇 第2章 社会革命と政治革命」所引、河上肇の傍点は省略、以下同じ⁽⁴¹⁾）

故に、河上肇は、社会革命のための政治革命を企てるのに時機尚早である時期においては、マルクス主義者の採りうる手段は、社会革命及びその社会革命のための政治革命を促進させることのできるあらゆる方策を助長することである（前掲書、「下篇 第3章 社会革命と社会政策」）、とする。その上で、河上肇は、メリヴェールの『殖民及び殖民地に関する講義』（1861年）に記載された、発展段階を異にする三種類の植民地社会における奴隷解放の例を挙げる。その中で、「『総ての生産力が其の組織内で余地ある限り其の発展を為し遂げ』」ていた第一類（ドミニカ等）を除いて、第二類（ジャマイカ）、第三類（トリニダト等）においては、奴隷制の廃止がむしろより高度の生産組織を解体し、生産力の減退をまねいた、と紹介する。

「解放されたる奴隷は各自が無主の富源に立籠ることにより、小規模なる孤立的の自足経済に復帰することが出来る。即ち奴隷主の支配の下に統一されていた多数労働者の労働の結合は、強制的束縛の解除と共に、忽ち解体されてしまって、生産組織は、より高度のものに進展する代りに、却てより低度のものに退却してしまい、その必然の結果として、生産力の減退を齎すのである。」（前掲書、「下篇 第4章 時機尚早なる社会革命の企⁽⁴²⁾」）

故に時機尚早である社会革命は失敗に終わる、たとえ社会革命を目的とした政治革命は成功するとしても、それはさしあたり政治革命の成功だけに止まる。

「政権の攫取者は代っても、社会の経済組織は権力者の任意に変更することの出来ない物質的基礎の上に立っているものだから、単なる政権の移動⁽⁴³⁾によって俄に変更され得るものでは決して無い。」（同上）

「時機尚早なる無産者の革命は、恐らく失敗するの外あるまいが、たとえ成功したにしても、少くとも当座の間は、単に政治革命としての成功に止まり、社会革命はそう容易に実現されはしないであろう。即ち当該社会は、従前無産者であって新たに政権を攫取するに至った人々の支配の下で、

依然資本主義的に発展するの外はあるまい。」(同上)⁽⁴⁴⁾

河上肇は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「下篇 第6章 政治革命後における露西亜の経済的地位」で、政治革命に成功したソビエト・ロシアが、1920年代初め無産者の執権の下に国家資本主義の育成励行の政策を行おうとしていることを、紹介する。河上肇は、ソビエト・ロシアの社会革命が今後数十年間において成功するかどうか、については、判断を留保している(前掲書、「下篇 第4章 時機尚早なる社会革命の企」)⁽⁴⁵⁾。逆にここからして、「時機尚早なる社会革命」を目指す政治革命について、社会革命の実現の困難さを認識するがゆえに、河上肇が或る程度の留保・危惧の念を抱いたとは言えるが、必ずしも一律に反対したとは言えない。⁽⁴⁶⁾

またさらに、河上肇は、「『社会組織と社会革命に関する若干の考察』序」(1922)で次のように論ずる。

「此の書には、社会主義的組織の実現に必要とされる生産力の発展程度の研究が省略されてある。マルクス主義によれば、社会主義が実現さるるための社会革命も、之が実現を目的とする政治革命も、旧組織たる資本主義制の下において社会の生産力が其の余地ある限り発展し了えることを、その前提条件とするのであるから、資本主義制の下における生産力の発展程度如何ということが、マルクス主義の研究にとっては、おのずから重要な一問題とならざるを得ぬのであるが、私の見るところによれば、その問題は之を世界的に(即ち問題を或る一国に限定せずして)考察する必要がある。⁽⁴⁷⁾

河上肇のこの言及は、資本主義の発達した当時の英国・米国等(政治革命の平和的経路の可能性・蓋然性のある国、また資本主義が相当に発達していたという意味で日本も含めていた可能性⁽⁴⁸⁾がある)を念頭において、その場合の資本主義制の下における生産力の発展の限度いかんを問題意識とした発言である、と私は解釈したい。⁽⁴⁹⁾

では、郭沫若はこうした河上肇の所論に対してどのように考えたのか。

先ず1924年7月22日付け何公敢宛て書簡(「社会革命的時機」<1926・1・19、『洪水』第1巻第10、11期合刊、1926・2・5>所引)から見て行きたい。郭沫若は次のように論ずる。欧州大戦の頃中国紡績業は非常に発展した。しかし大戦終結後、各国の経済状況の回復にともなって、中国の紡績業は大打撃を受け、ほぼ壊滅に瀕した。このような情況認識に基づいて、郭沫若は、

「個人資本主義は絶対的な保護権力がなければ、中国では国際資本家と競争することが極めて難しいことが分かります」（1924年7月22日付け、何公政宛て書簡）、とする。現段階の中国において、絶対的な国家権力の下でこそ、経済の発展・資本主義の育成が可能である。そのためには国営化政策、社会主義の道を探ることが近道にはかならない。故に、郭沫若は次のように主張する。

「私は、産業が進歩していず物質条件が備わっていない国において、社会主義の実現を目的とする政治革命は早ければ早いほど良い、と信ずるものです。ロシアが絶好の例です。政治と経済は同時に解決することはできません。要は政治の改革が経済の改革を目的とするところにあります。」

（同上）

現在は社会革命の「宣伝時期」（同上）であり、いかに現政権を打倒して政権を奪取するかこそが、この時期に討論し実行すべき問題となっている、とする。

河上肇の指摘する、英国植民地の奴隷解放の失敗例（奴隷解放によって、生産力の減退をまねいた例）は、逆に言うと、それ以前に、欧州人が強力によって、十分発展しきっていない段階の植民地の自足経済を奴隷制に変え（これも「時機尚早なる社会革命」である）、これによって物質的生産を明らかに増進させたことをも、証明している。故に社会革命の成功失敗は、社会革命の時機が早いか遅いかの問題によるのではなく、その方策が完備したものであるかどうかによる、と郭沫若は論ずる。

郭沫若は、この書簡においては、社会革命と政治革命を区別し、政治革命を経て、その政治権力の下に社会革命を推進実現する、という理論的前提に立って議論している、と思われる。言い換えると、郭沫若の所論は、先に挙げた河上肇の理論を踏襲した上での、それを前提にした上での、反論であることが分かる。

その前提に立ちつつ、(1) 郭沫若は、中国の政治・経済についての現状分析を基礎に、またロシア革命（1917年）以後のソビエト・ロシアの状況を念頭におきつつ、「宣伝時期」にある中国において政治革命をいかに早く実現するかが、先ず重要な問題である、とする。

(2) また、政治権力獲得後の社会革命が成功するかどうかは、時機が尚早かどうかの問題ではなく、その計画が周到緻密なものであるかどうかにかか

る、とした。

郭沫若は、「社会革命的時機」（1926・1・19、前掲）でこの何公敢宛て書簡（1924・7・22）を引用した後、1926年1月当時から見ても、この書簡の内容には大きな誤りはないとし、さらに議論を進める。

郭沫若は、「社会革命的時機」（1926・1）においてシュタウディンガア（⁽⁵⁰⁾ Staudinger）の『道徳の経済的基礎』（『Wirtschaftliche Grundlagen der Moral』、1907）の一節「唯物史観と實際的理想主義」（堀経夫訳、『唯物史観研究』＜河上肇著、弘文堂書房、1921・8・20、中井の使用する底本は、1923・10・1、第14版、三重大学所蔵本＞所収）の一部分を引用する。⁽⁵¹⁾

『吾々は今日まで無情冷酷なる社会的因果律によって支配され来った。そうして今後と雖も或る不定の期間は、之を脱れることは出来ないであろう。併し吾々は、知識の進歩と共に、この因果律を発見し、自覚し、そうして終に之を支配し、利用することが出来るのである。「かくある」ものを、「かくあるべし」の方向へ意識的及び有目的に轉換せしむることが、人類に許されているのである。茲に理想主義が力強く立ち現われて、吾々に前途の光明を与うることとなる。社会主義は、共同管理による社会支配という名称を以って、理想社会を特徴づけている。……エンゲルスの所謂＜必然の王国より自由の王国への跳躍＞は、茲に其の真意義を見出すこととなった。』（「唯物史観と實際的理想主義」、「社会革命的時機」＜1926・1＞所引、引用日文の底本は、「唯物史観と實際的理想主義」＜堀経夫訳、前掲＞に依る。傍点部分を、郭沫若は「」で表す。）

郭沫若は、マルクスが必然の世界（「かくある」＜Sain＞の世界）を研究した結果、次のような社会的因果律を発見した、と論ずる。

「或る社会制度がその社会において生産力の桎梏となった時、たとえその自然のままに任せておいても（実際にはこれは全くの仮定である）、さらに高次の社会制度を生み出すであろう。」（「社会革命的時機」、1926・1）

しかし郭沫若は、私達が社会的因果律を把握した以上、当為の価値問題（「かくあるべし」＜Sollen＞の価値問題）から論ずれば、私達は何らかの手段を用いて、早めに旧社会をその限界まで発展させ、早めに新社会を生み出すことができる、とする。⁽⁵²⁾

郭沫若もマルクスの二面性を指摘する。マルクスは唯物史観において冷静

で穏やかな進化論者であった。

『一の社会組織は、総ての生産力が其の組織内で余地ある限り其の発展を為し遂げた後でなければ、決して顛覆し去るもので無く、又新たな、より高度の生産関係は、其のものの物質的存在条件が古き社会の胎内に孕まれたる以前に於て、決して発現し来るものでは無い。』（『『経済学批判』序言』、1859、「社会革命的時機」<1926・1>所引、引用日文の底本は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「下篇 第2章 社会革命と政治革命」に依る。）

しかし『共産党宣言』⁽⁵³⁾においてマルクスは猛烈な煽動的革命論者である。『共産主義者は、いたるところで、現存の社会ならびに政治状態に反対するすべての革命運動を支持する。すべてこれらの運動において、共産主義者は、所有の問題を、それがどの程度に発展した形態をとっていようと、運動の根本問題として強調する。……支配階級をして共産主義革命のまゝに戦慄せしめよ。』（「社会革命的時機」<1926・1>所引、引用日文の底本は、『共産党宣言』<国民文庫、大月書店、1952・7>、傍線は、郭沫若に依る。）

郭沫若も、河上肇と同じように、これをマルクスの思想的矛盾とは考えなかった（この点に思想的矛盾を見た学者の例として、郭沫若も、「Toenies、Sombart」を挙げる）。郭沫若の場合、この二面を、「必然」の研究（郭沫若原文、『必然』的研究）と、「当為」の要求（郭沫若原文、『当然』的要求）とに明確に分けるべきだ、とする。故に必然の研究の面から言えば、「『一の社会は其の進行の自然法則を探求し得たにしても、その社会は自然的の発展階段を跳び越えることも出来なければ、立法によって排除することも出来ない。』」（『『資本論』序言』、1867年、「社会革命的時機」<1926・1>所引、引用日文の底本は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「下篇 第2章 社会革命と政治革命」に依る。）しかし当為の要求の面から言えば、『其れは産みの悩みを短縮し且つ緩和することが出来る。』（同上）

郭沫若は、個人資本主義がまだ破産していない前において、目的を持ち計画のある社会革命を早めに企て、それによって大多数の無産階級の苦しみを『短縮し』且つ『緩和する』ことは、道理において当然のことであり、しかも事実においても不可能なこととは思えない、とする。

さらに、郭沫若は、先の何公敢宛て書簡と同じ西インド諸島（英領植民地）

の例のほかに、日本の明治維新の例（『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「上篇 第2章 資本蓄積の必然的行き詰り」「第12項 資本主義発展の史実の裏書」）を挙げ、明治維新が、「時機尚早なる社会革命」であったにもかかわらず、むしろ生産力の減退をまねくことなく、日本資本主義の発展につながったことを、河上肇の明治維新についての当該部分の言及をも引用しつつ、指摘する。故に、時機尚早の社会革命がもしもその企図の当を得たものであるならば、必ず失敗するものとは思えない、とする。河上肇の、「『マルクス主義によれば、社会主義が実現されるための社会革命も、之が実現を目的とする政治革命も、旧組織たる資本主義制の下において社会の生産力が其の余地ある限り発展し了えることを、その前提条件とする』」（『社会組織と社会革命に関する若干の考察』序）、1922年、「社会革命的時機」〈1926・1〉所引）、という論に、郭沫若は反対する。河上肇の「序」の考え方によれば、社会主義を実現するための社会革命も、社会革命の実現を目的とする政治革命も、資本主義が発展を極めまさに破産しようとしていることを前提として、始めて行われるべきものとなる。（このように、郭沫若は河上肇の「序」を解釈した。）しかしマルクスは、1849年5月19日の『新ライン新聞』で、「『旧社会の死の苦悩と新世界の誕生に伴う流血の努力とを簡単にし、短かくし、集中するための方法はただ一つしか無い——革命的恐怖即ち是れだ。』」（マルクス、「戦時法規による『新ライン新聞』の禁止」、「社会革命的時機」〈1926・1〉所引、引用日文の底本は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「下篇 第2章 社会革命と政治革命」）と言ったように、強力による流血の政治革命を否定していない。

故に、郭沫若は、マルクスのこうした革命論者としての言論と、進化論者（「唯物史観」〈「社会革命的時機」〉）としての見解の二面を、「二元的」（「社会革命的時機」、1926・1）に解釈する。後者（進化論者としての見解）は「必然」の研究であり、前者（革命論者としての言論）は「当為」の要求である。ただ、「当為」の要求は「必然」の研究の上に築かれる、と。

以上のように見てくると、次のように言える。マルクスの「進化論者」としての一面と、「革命主義者」としての一面について、河上肇は、マルクスにおける「社会革命」と「政治革命」の区別を明確にして解釈した。河上肇は、ゾンバルト・テンニース等がマルクスの「進化論者」と「革命主義者」との矛盾撞着を見た点について、むしろ「社会革命」と「政治革命」の概念

の区別を明確にすることを通じて、両者の連関する関係を明らかにし、整合的に解釈した。その場合河上肇は、早い時期の政治革命がたとえ成功したとしても、その後の「時機尚早なる社会革命」の成功には、長期の時間を必要とするということ（社会の経済組織は権力者の任意で変更しえない物質的基礎の上に立つ故に）、或いはその「時機尚早なる社会革命」は必ずしも成功するとは限らない、という留保・危惧を、表明している、と言える。さらに、英国・米国等のような資本主義の発達し民主主義的制度の整った国を念頭において、政治革命の平和的経路の可能性・蓋然性を指摘しつつ、そのための生産力の発展の限度はどこにあるか、を問題意識として持っていた、と思われる（こうした問題を考えるに当たって、当時やはり資本主義の発達していた日本の問題は河上肇の最も関心の深いところであった、と思われる）。

これに対し、郭沫若は、「社会革命的時機」（1926・1）において（引用する1924年7月22日何公敢宛て書簡以外の部分において）、河上肇の「社会革命」と「政治革命」の概念上の区別を否定はしていない、と思われる。しかし郭沫若は、その概念上の区別の上に立った河上肇の所論をそのまま踏襲するのではなく、シュタウディンガーの解釈を導入して、進化論者としての一面を「必然」の研究（歴史的研究、「唯物史観」）とし、革命主義者としての一面を「当為」の要求（社会革命の促進の要求、或いは政治革命の要求）として、二元的に分ける。その上で、世界の中におかれた中国の政治・経済の現状分析を基礎として、「当為」の要求による早い時期の政治革命を積極的に肯定し、それを通じて獲得した政治権力の下に社会革命を周到に準備計画し、段階を踏んで推進することは、不可能ではない、と考える。この場合、郭沫若の念頭にあったのは、当時のソビエト・ロシアにおけるレーニンの理論・政策であった、と思われる（『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「下篇 第6章 政治革命後における露西亞の経済的地位」）。

この意味において、郭沫若は、河上肇の理論（或いは河上肇によって紹介された理論）⁽⁵⁴⁾を自家葉籠中のものとしながら、中国政治・経済の現状分析を根拠にしつつ、シュタウディンガーの理論を援用することを通じて、河上肇の整合的解釈の上に立つ「時機尚早なる社会革命」の失敗の危惧、そして「『社会組織と社会革命に関する若干の考察』序」（1922）における言及を乗り越えようとした、と思われる。

後者の「序」については、先に少し触れたように、河上肇の意図は次のよ

うなものであった、と思われる。河上肇は、例えば当時の英国・米国等（日本の問題も含めて）のような発達した資本主義国の社会革命・政治革命（平和的経路の可能な場合のある）を念頭におきつつ、世界全体の資本主義化という、資本主義制下の生産力の発展の将来的限界の問題を明らかにする必要があると考えていた。「序」の問題意識は、発達した資本主義制の下における生産力の発展の限度を問う必要性の指摘であった。

しかし郭沫若はそのように解釈しなかった。むしろ郭沫若は、「序」における河上肇の言及を、資本主義の発展していない半封建半植民地の中国にも留保なく適用される、社会革命・政治革命の際に必須な生産力に関する一般論として捉えたために、すなわち「時機尚早なる社会革命」の企てそしてそのための政治革命は必ず失敗するという一般論として捉えたために、河上肇の所論を郭沫若なりに乗り越える必要があった、と思われる。

そこには、窮迫する中国社会経済情勢の圧力を正面から受け止め、中国変革のために、平和的経路をたどる政治革命の不可能な中国の救済のために、「必然」の研究と「当為」の要求に基づいて、実践的解決へ踏み出すこと（社会革命を展望した上での強力による政治革命の遂行）を焦眉の課題と考える郭沫若の姿勢がうかがわれる。

〔注〕

- (36) : 「『一个的社会组织对于一切的生产力尚有余地使其尽量地发展时、是决不颠覆的；并且新的更高级的生产关系、在其物质的存在条件未含孕于旧社会底胎内以前、亦决不会发现。』」（「下篇 第二章 社会革命与政治革命 第一节 问题之所在—马克思学说中之所谓二个的交流」、傍点は省略）
- (37) : 「『共产党之最捷近的目的……是无产者之阶级形成、有产者支配之颠覆、无产者手中政权之夺取。』」（「下篇 第二章 第一节」、傍点は省略、なお『共産宣言』は河上肇の原文のまま、注53を参照されたい。）
- (38) : 「『他们公然地宣言、他们的目的只有由强压地颠覆一切从来的社会秩序才能达到。使支配阶级在共产主义者革命之前战栗哟！』」（「下篇 第二章 第一节」、傍点は省略）
- (39) : 河上肇は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（「下篇 第2章 社会革命と政治革命」で、ゾムバルトの『社会主義及び社会運動』（『Sozialismus und Soziale Bewegung』、1919）の「第1篇 第4章 第1節 マルクスの学説における矛盾」を紹介する。また同じ箇所、河上肇はテンニースの『Karl Marx』（1921）の説も紹介する。
- (40) : 河上肇は、前掲書「下篇 第2章 第4項 社会革命と政治革命との関係」において次のように論ずる。

マルクス・エンゲルスは、唯物史観の主張者であるという点において「進化主義者」であつたし、同時に政治革命の主張者であるという点において「革命主義者」であつた。マルクス・エンゲルスによれば、社会革命（一つの社会組織から他の社会組織への推移）は、社会の生産力が従来³⁷の組織内でその余地ある限り発展し終えたあとでなければ、決して実現されえない。だから社会主義の実現を目的とする無産者の政治革命は、その目的とする社会革命を実現しうる可能性のある場合に限り、資本主義が余り遠くない中に行き詰まると予想できる場合に限り、始めて是認されるべきものである。しかしながらマルクス・エンゲルスがこの理論を実際に当てはめるとき、しばしば誤解を免れな

かった。例えば1848年『共産党宣言』において早くも政治革命の必要を唱導したのは、当時資本主義的生産組織が行き詰まりに既に近づいたものと観察したためである。しかし五十年後、1895年『フランスにおける階級闘争』の序においてエンゲルスの述べるところによれば、当時「経済的發展の状態が、資本家的生産の排除のためには、まだ遙に熟していなかった」。1872年、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』の序によれば、「過去二十五年間における大工業の偉大なる發展」があった、と言う。このようにマルクス・エンゲルスは、唯物史觀の理論は少しも動揺しなかったけれども、原理の「實際的応用」において間違いがあった、と河上肇は論ずる。

- (41) : 「『(労働者为树立劳动之新组织、在什么时候总有掌握政权的必要。) 但是要达到这个目的的路径、我们不是主张着随处都是同一的。(中略) 如像美国和英国一样的国度里(中略) 劳动者能以平和的路径达到他们的目的、我们是并不会否认的。但是一切的国家不能说都是这样。』」
(「下篇 第二章 第五节 政治革命之必要—平和的革命之可能」、傍点は省略)
- (42) : 「被解放の奴隶各自坐守无主之富源而复归于小规模の孤立的自足经济；即是在奴隶主之支配下所统一了的多数劳动者之劳动结合、随着强制的束缚之解除、便立地解体；生活组织不惟不能进展于更高级的组织、反降退于较低级的组织、其必然之结果自然是生产力之减退了。」
(「下篇 第四章 时机尚早的社会革命之企图 第一节 时机尚早的社会革命招致生产力之减退<英領殖民地奴隶解放之实例>」)
- (43) : 「政权之掌握者虽然瓜代、社会之经济组织立于不能由权力者之任意而变更的物质的基础之上、单是政权移动是决不能立地变更的。」
(「下篇 第四章 第二节 时机尚早的社会革命终于失败<以社会革命为目的的政治革命即使成功也只是单纯的政治革命而已 >」)
- (44) : 「预计の无产者革命恐怕只有归于失败的、即使成功、在目前也只是政治革命之成功而已、社会革命是不能那样轻易实现的。即是从前的无产者从新掌握政权、在他们的支配之下、革命后的社会依然是只有依着资本主义的方法而发展。」(「下篇 第四章 第二节」)

ここでは郭沫若は、河上肇の「時機尚早の」という言葉を、「預計」と訳す(第四章の本文では、すべて「預計」と訳す)。「預計」は、

予め計画されたという意味であると思われ、時機尚早のニュアンスとは異なるところがある。しかし一方「第四章 时机尚早的社会革命之企图」等のように章・節の表題は、「时机尚早」と訳す。

訳語を変える郭沫若の意図はどこにあったのだろうか。一つの解釈の可能性として次のようにも考えられる。「時機尚早の」という形容は社会革命から見た言い方であり、それを政治革命から見れば「予め計画された」とも訳すことが可能と思われる。

(45) : 河上肇は次のように言う。

「私は露西亜に企てられた社会主義の革命が、時機尚早のものであるか否かを知らない。けれども、其れはそうであっても無くても、今後数十年間における露西亜の歴史は、社会組織進化の理法を知らんとする吾々に向つて、極めて有益なる無数の材料を提供するに相違ない。只それに基づいて、今日よりも猶お一層意識的なる社会運動の指針を示すことは、恐らく吾々よりより若き人々の仕事であるであろう。」

（「下篇 第4章 時機尚早なる社会革命の企 第2項 時機尚早なる社会革命は失敗に終るべしとい之を目的とする政治革命は成功するも其れは単なる政治革命に止まるべきこと」）

郭沫若は以下のように訳す。

「目下俄国所實現了的社会主义的革命究竟是预计与否、我不得而知。但它无论是与不是、在此后数十年间的历史、对于我们想知道社会组织进化之理法的人、自会呈出无数有益的资料。至于由这些资料以指示出比今日更有意识的社会运动之方针、这恐怕是比我们更年轻的人们底事业了。」（「下篇 第四章 第二节」）

(46) : 河上肇は、「マルクス主義に謂う所の過渡期について」（『經濟論叢』第13巻6号、1921・12・1、底本は『河上肇全集』第11巻、岩波書店、1983・1・24）において、次のように指摘する。

「過渡期の要件は、無産者の執権という政治形式である。しかし仮い斯様な政治形式を採つても、その国の經濟状態が後れては、容易に社会主義を實現することは出来ない。それなら經濟状態の幼稚な国が急いで過渡期に這入るのは、畢竟無用のことに過ぎないかと云うに、決してそうでは無い。社会はそういう政治形式を採ることにより、意識的に社会主義の實現に必要な經濟的、物質的条件の完成を急ぐこと

が出来る。過渡期に這入ると云うことによって、其の社会は意識的に社会主義を目がけて進むことになる。」

また、河上肇は「唯物史観問答——唯物史観と露西亜の革命——」（『我等』第4巻1号、1922・1・1、底本は『河上肇全集』第11巻）で次のように言う。

「A 君の考によると、無産者の執権という政治形態を採って、所謂社会主義の革命を起して見たところで、社会主義の実現には一定の物質条件の具わることが必要だから、当分の中は資本主義的に発達するより外は無いので、容易に社会主義は実現できないと云うことらしいが、もしそうだとすれば、露西亜の革命は何の意味も無いことに為りはせぬか？」

B 意味が無いことは無いさ、寧ろ大に有るさ。という訳は、此の革命によって、レーニンの所謂『社会主義への推移を必ず実現するという意志』が、国家の政治形態の上に具体化されたのだから、その実現は数十年後のことにしたところで、兎も角その実現の保証が今実現されている訳だ。この保証が得られたと云うことは、意味が無いどころか、大変に重要な意義のある事だ。」

また、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（下篇 第5章 第8項 経済的経営（産業経営）期と社会主義革命の成就）では次のように言う。「経済的発達の比較的後れた国が、その比較的に進んだ国よりも、早く社会主義の政治革命を起すと云うことは、勿論あり得べきことで、現に今日の露西亜が何よりも其の実例を示している。しかし其れは只社会主義の政治革命が起ったと云うだけのことで、『社会主義革命』が実現されるためには、露西亜は之から長い期間に亘るべき第三期の経済的経営期を経過しなければ為らぬので、社会主義が一挙にして実現さるる訳でない」と云うことは、私の既に繰り返し述べた所である。」

郭沫若は上文を次のように訳す。

「经济的发展比较地落后的国家、比比较地进步的国家、得以早时发起社会主义之政治革命、目前的俄罗斯便是一个实例了。但是这只是社会主义之政治革命之发起、要实现『社会主义革命』、俄国是还不得不经过此后第三期之经济的经营的。」

社会主义之实现不是一朝一夕可以企及的、我在前面已经反覆叙述过了。」

- (47) : 「此书中关于社会主义的组织之实现上所必要的生产力发展程度之研究是省略了的。据马克思主义、以为无论是实现社会主义之社会革命或实现社会革命之政治革命、是以旧组织之资本主义下社会之生产力再无发展之余地为前提、所以资本主义下生产力发展之限度如何、这在马克思主义研究上、自然不能不为重要问题之一、但据我看来、这个问题有世界的（即不使限定于一国）考察之必要。」（「原序」）
- (48) : 『河上肇全集 第11卷』「解題」（山之内 靖）によれば、ロシア革命の理解をめぐる苦悩していた1922年頃の河上肇は、ロシア革命について理論的な解釈の道をつけると同時に、「そこには、生産力の発展に即して資本主義から社会主義への平和的移行が行われることを期待する河上の心情が、微妙に反映していた」、とする。
- (49) : 『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「上篇 第2章 第13項 資本主義的生産の必然的行き詰り」で、河上肇は次のように論ずる。資本主義の発展には、資本主義以外の領域（ここでは先資本主義的組織の領域を挙げる）が必要である。その領域が世界においてすべて資本主義化されたとき、資本主義の生産力の発展の行き詰まりが訪れる、とする。もしも河上肇がそのように考えていたとすれば、資本主義の生産力の発展の限度は、当時においても遙かに将来のことと見なしていた可能性が強い。
- (50) : シュタウディングガー（Franz Staudinger 1849—1921）は『哲学事典』（平凡社、1971・4）によれば、ドイツの哲学者、社会主義者で、個人と社会との関係に関し、「倫理的 sittlich 問題は社会的 sozial 問題である」という主張に到達した、と言う。邦訳に、『道徳の経済的基礎』（草間平作訳、岩波文庫、1931）がある。
- (51) : ここで郭沫若は、河上肇の『唯物史観研究』の名前を挙げて、シュタウディングガーの文章を引用する。故に郭沫若が『唯物史観研究』の、少なくとも一部をすでに読んでいたことが分かる。河上肇は、「唯物史観と実際的理想主義」を『唯物史観研究』に載せるにあたって、その目的を、「一つには」、新カント派に属する哲学者の中にも、唯物史観を是認するものがあると云う一例を示さんがためである」、と前

書きしている。河上肇はシュタウディンガーを新カント派とする。

- (52) : 河上肇は、『唯物史観研究』（弘文堂書房、1921・8・25、底本は『河上肇全集 第11巻』）「第4章 唯物史観と必然論」で次のように言う。

「マルクスは歴史の進行に関し、一の自然科学的の因果法則を発見した人である。そうして吾々は、その因果法則を名けて、マルクスの唯物史観と謂うのである。彼れの見る所に依れば、一定の社会組織が社会の生産力の発展を束縛することに為れば（原因）、其の社会組織は早かれ晚かれ、或は急激に或は徐々に、必然的に崩壊して、新たなる社会組織が之に代ることと為る（結果）。之は一個の自然科学的なる因果の法則である。然るに現代の社会組織たる資本主義は、最初の間こそ社会の生産力の発展を助長したれ、其の生産力が已に或る程度までの発展を為したる後は、同じ資本主義の組織が却て社会の生産力のそれ以上の発展を束縛するに至るものである。故に資本主義の組織は早晚必然的に崩壊して、社会主義の組織之に代るに至るべしと云うので、畢竟社会主義の実現は、マルクスにとっては、一個必然の運命に外ならぬのである。是れ吾々が、マルクスの社会主義を以て、一種の必然論なりと謂う所以である。

然るに此の必然論に対しては、多くの非難がある。就中、其の最も普通にして且つ容易に人の賛成を得るものは、マルクスの思想は其の必然論のため当然無為拱手論に終るべきであるという非難である。社会主義の実現が必然の運命であるならば、吾々は只手を拱き為すことも無くして、単に其の必然の到来を俟つより外には無い。然るにマルクス及び彼れの思想を奉ずる人々が、熱心に社会運動のため奔走せんとしつつあるは、何故であるか。其れは明かに一個の自家撞着では無いか。之が其の非難の要領である。

然るに私の見る所に依れば、此の非難ほど無意味のものは無い。例えば茲に医学者がいて、母胎に産児の宿り居るを診察し、早晚出産のことあるを予言したりとせんに、吾々は其の必然論を聞いて、早晚来るべき出産時に於ける各種の準備に心をこそ配れ、決して無為拱手に終るべき筈は無い。」

このように、河上肇はマルクスの唯物史観を承認しつつ、決して無

為拱手論をとるものではなかった。社会組織の改造が必然的に宿命的に機械的に実現される、とも考えなかった。河上肇は、「社会主義革命の必然性と唯物史観」（『我等』第4巻5・7号、1922・5・1、7・1、底本は『河上肇全集 第11巻』）で次のように言う。

「マルクスは、資本主義制が倒れて社会主義制が始まる時を以て、人類の真の歴史の第一頁をなすものと思っていたようだが、僕は事によると、資本主義制が倒れ切らずに、従て人類の真の歴史が始まる代りに、人類の『共倒れ』が起らぬとも限らないと思うのだ。その意味に於て、英米仏独その他資本国の将来はどうなるかも分らない、進化して社会主義国となるか、退化して一種の金権的封建国となり、人類滅亡の第一歩を踏み出すことになるか、それは此等諸国の無産階級の生きんとする本能の力に依存していると考えなのだ。その力が旺盛であれば鉄をも石をも貫くであろうし、その力が薄弱であれば有産階級の圧力のために潰壊して仕舞って、昔の希臘やエジプトのようになりもするであろう。（中略）人類が生き伸びて行くためには、一定の時代に社会組織の改造が『必要』になってくる、そうして生きて行くために必要なことは、人間の生きんとする本能の力が弱らぬ限り、『必然』に実現されるに違いない、とそういう風に考えているのだ。しかし屈服されている階級が自覚を起そうと起すまいと、奮発しようとするまいと、そんなことには関係なく、社会組織の改造は、必然的に宿命的に機械的に実現されるものだ、という風には考え得ないのだ。その点に於て、僕の考には、悲観的の分子が混ざっている。」

- (53) : 郭沫若の「社会革命的時機」（1926・1）における原文は、『共産宣言』とする。河上肇も『社会組織と社会革命に関する若干の考察』において、『共産宣言』（例えば、「下篇 第2章」等において）とする。
- (54) : 郭沫若は「売淫婦の饒舌」（1926・3・9、『洪水』第2巻14期、1926・4・1）で、エンゲルスの言葉に対する郭心菘の訳語『死滅』について、原注を附け次のように言う。

「（註）『死滅』という言葉は原文では *einschlafen* である。私は『永眠』と訳した方が良いと思う。というのも下文には別に *absterben* という一語があり、これこそ『死滅』と訳すことができるからである。

河上肇氏<資本主義より共産主義への推移の過程>（郭沫若原文では、<从资本主义向社会主义推移之过程>とする——中井注）の第三項はこの文を引用する。しかしこの二語の位置が前後転倒している。」河上肇は、エンゲルスの文章『反デューリング論』の、*einschlafen* と *absterben* の部分について次のように訳載する。

『或る階級をば抑圧しておく必要が最早や無くなってしまえば、……特別な抑圧力たる国家も亦た必要が無くなる。……社会関係に対する国権の干渉は、或る範囲より他の範囲へと次第に不用となり、かくて其れ自身が静かに死去（*absterben*）する。物の管理（*Verwaltung*）及び生産過程の指導が、人の上に行われる統御に代わる。国家は廃棄（*abschaffen*）されるのでは無い。それは永眠（*einschlafen*）してしまふのである。』（『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「下篇 第1章 第3項 共産主義の完成期」）

問題とする部分のドイツ語原文と比較してみることにする（Herrn Eugen Dührings *Umwälzung der Wissenschaft*, Karl Marx Friedrich Engels Werke Band 20 Dietz Verlag Berlin 1962）。

「Das Eingreifen einer Staatsgewalt in gesellschaftliche Verhältnisse wird auf einem Gebiete nach dem andern überflüssig und schläft dann von selbst ein . An die Stelle der Regierung über Personen tritt die Verwaltung von Sachen und die Leitung von Produktionsprozessen . Der Staat wird nicht “abgeschafft” , er stirbt ab .」

郭沫若の指摘するように、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』の引用部分において、カッコ内のドイツ語 *absterben* と *einschlafen* が転倒して引用され、従って訳語も転倒していることが分かる。しかし郭沫若自身も、1925年5月初版の『社会組織と社会革命』では何の注釈も附けず、河上肇の誤解を踏襲する（1932年版も同じ。1951年版ではドイツ語を省略するのみで、同じ）。その後、1926年3月9日以前に郭沫若は原文と対照して、河上肇の誤解に気づいたものと思われる。この点からして、郭沫若がいかに注意深く河上肇の所論を自家葉籠中のものとしていたかが分かる。